

Title	反復疑問について
Author	宮田, 一郎
Citation	人文研究. 24 卷 2 号, p.96-110.
Issue Date	1972
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学部
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

反復疑問について

宮 田 一 郎

「来不来?」「吃飯不吃?」型の「反復疑問」は、隋唐にその原型をみることができるが、口語のなかで排他的に定型化するのには、近代語以降においてであって、それまでは、「来也不来?」「吃飯也不吃?」型が並行しており、「来不?」「吃飯不?」にも、近代以前は「来也不?」「吃飯也不?」型が並存していた。「也」は唐五代のころ「已」「以」と表記されていたもので、「與」に由来する。「吃飯不吃?」型に対する「吃不吃飯?」型は、文献にはあまりあらわれないが、早くからおこなわれていたもので、用例が散見される。

§1 「是不是?」「来不来?」「吃飯不吃?」「有錢没有?」「好不好?」などのように、ある事態についての肯定と否定の両面をしめし、そのいずれかの一面を選択させることによって、相手の意向、見解を確認するという表現型、いわゆる「反復疑問」文型は、現代語において、一般におこなわれているところであるが、古代語においては、文末に否定詞をおいて、この種の確認疑問をあらわすという方法がとられている。

既已告矣，未知中否?（莊子：天地）

視吾舌尚在不?（史記：張儀列伝）

今日上不至天，下不至地，可以言未?（三国志：諸葛亮伝）

晚来天欲雪，能飲一杯無?（白居易：問劉十九）^{注1}

このばあいの否定詞は、現代語の「要不，我自己去」「再不，我一起去吧」の「要不」「再不」における「不」とおなじように、まえに叙述している内容をうけて、その否定的内容をしめすという、代詞的はたらきになっていて、単なる否定副詞ではない。「中否?」「在不?」はそれぞれ「中不中?」「在不在?」という意味であって、「中否?」「在不?」という表現の基層には、

「中不中?」「在不在?」がある。したがって、「是不是?」「来不来?」型の表現が顕現してくることもあるわけで、隋唐の詩人の詩句のなかに、つぎのような例があらわれている。

借問行人歸不歸? (隋, 無名氏詩)

相喚聞不聞? (孟郊詩)

宣州太守知不知? (白居易詩)^{注2}

おそらくは、当時の口語の反映とおもわれるが、その後の作品においても、口語化のすすんでいるものに、多くこの型があらわれており、唐五代のものには、「有錢没有?」型、すなわち動詞に賓語などの後置成分がともなっている「反復疑問」文型の用例もあらわれている。以下は、敦煌変文における用例である。

大雪山南面, 有一梵志婆羅門僧, 教学八万個徒弟, 曾聞不聞? (敦819)

阿嬢上樹摘桃, 樹下多埋惡刺, 刺他兩脚成瘡, 這個是阿誰不是? (敦131)

陵在蕃中有死色無? (敦93)

したがって、現代語における「是不是?」「来不来?」「吃飯不吃?」などのような「反復疑問」文型は、すくなくとも隋唐以来の古い歴史をもつものといわなければならない。しかし、この時代において、この型は唯一の型ではなく、この型に統一されて、口語のなかで定型化するのには、はるか後代になってからである。すなわち、唐五代では、「是也不是?」「来也不来?」型が並行してもちいられており、そのころの口語の反映がみられる敦煌変文には、つぎのような用例がみられるのである。

蛮奴是即大名將, 乍舒心生不分, 從城排一大陣, 識也不識? (敦202)

既是巡營, 有號也無? (敦38)

変文のなかでは、上例におけるように、「也」を肯定と否定の両表現の間に介在させる型と、さきにあげたような、「也」を介在させずに、肯定と否定の両表現を直接につなぐ型が並行してもちいられており、この「也」を介在させる型は、その後も宋元、明の各作品にわたって、ひろく用例がみられる。「清平山堂話本」「警世通言」「水滸」「金瓶梅詞話」における例をしめすと、つぎのとおりである。

我交官人撰百十錢把来將息, 你却肯也不肯? (清172)

孩兒，你見也不見？（警227）

我自教人把錢來。我也不時自來，和你相聚。是好也不好？（警280）

老翁願也不願？（警324）

與我撈起着實打，問他招也不招？（警369）

官人有妻也無？（警587）

你還也不還？（水317）

你們還我也不還？（水602）

你拿得張三時，花榮知也不知？（水521）

宋押司下處不見一個婦人面、他會有娘子也無？（水305）

嫂嫂，你有孕也無？（水745）

我店里有兩個人，好生脚叉。不知是也不是？（水1055）

細思当初起將病之由，看是也不是？（金735）

熱了水，娘洗澡也不洗？（金73）

你既是施藥濟人，我問你求些滋補的藥兒。你有也沒有？（金555）

且問嫂子。你下邊有猫兒也沒有？（金194）

大姐，陳姐夫會看牌也不會？（金184）

「朴通事諺解」にも，つぎのような用例がみえており，明代の口語で，「也」をはさんでいう話法があったことを知ることができる。

你與我看一看，中也不中，將來我念。

你的刀子快也鈍？

もちろん，「也」を介在させる型のみがもちいられていたわけではなく，変文におけるばあいと同様に，「也」をはさまない型も並用されているわけである。

師兄，你見不見？（清71）

劉添祥，這劉安住是你姪兒不是？（清37）

這個是奪你女兒的不是？（水1233）

しかし，並用とはいっても，その比重は同じでなく，「水滸」と「金瓶梅」をくらべてみると，「水滸」では「也」を介在させるのが普通になっているのに対して，「金瓶梅」では「也」をはさまないのが一般になっているという，きわだった対照がみられる。「水滸」では，「也」をはさまない型は，

上例をふくめて2例ほどであるのに対して、「金瓶梅」では、「也」をはさむ型が、上にあげた例をふくめて、10例ほどしかみられず、「也」をはさまない型は、その数倍にも上っているのである。

姐姐，爹請我做甚麼？你爹在家里不在？（金129）

你燒靈那日，花大，花三，花四，請他不請？（金165）

你爹有書沒有？（金171）

哥兒，今日來不來？（金434）

明日十五衙門里拜牌，晝公座，大發放。爹去不去？（金746）

你出去不出走？（金492）

我醉不醉？（金930）

我有椿事兒史你，依不依？（金932）

吾師用酒不用？（金556）

你家媽媽兒吃小米粥不吃？（金688）

那個娘娘怎麼模樣，你認的他不認的？（金695）

哥家里還添個人兒不添？（金1037）

李三哥來，今有一宗買賣與你說。你做不做？（金1036）

淫婦，你想我不想？（金1046）

大姪子，我說的是不是？（金978）

咱安排一席酒兒，請他爹和大姐姐坐坐兒，好不好？（金221）

你會唱“比翼成連理”不會？（金916）

この両作品における対照から、宋元、明初では、「也」を介在させる型が比較的優位を占めていたが、逐次その優位を失い、劣位に転じていくことがうかがわれる。この傾向は、清代にはいると、さらに顕著となり、まったく生産性を失うようになる。このことは「醒世姻縁伝」「紅樓夢」にいたる過程に、よくあらわれている。

據那抄來的招上，你也就是極可惡的人。這是真也不真？（醒871）

怎麼樣着？去呀不去？（醒591）

我猜你待要欺心，又沒那胆，是呀不是？（醒370）

我說的是呀不是？你姑夫再想。（醒815）

「呀」は「也」にあてられているものであるが、「醒世姻縁伝」では、「也（呀）」を介在させる型は、上掲の数例にかぎられていて、「金瓶梅」にくら

べても、用例はさらにすくなく、また用いられているケースも、「是呀不是」「真也不真」など、きわめて限定されたものになっている。「紅樓夢」では「紅樓夢八十回校本」につきの3例がある。

黛玉便忖度着因他有玉，故問我有也無。（3回 33頁）

那宝玉聽了，不知依也不依。要知端詳，且聽下回分解。（29回 313頁）

外人知道這性命臉面要也不要？（74回 829頁）

これらは、「校本」がテキストとしている「戚本」によっているものとおもわれるが、この箇所「也」をもちいていない版本が多く、たとえば、「程甲本」「程乙本」はつぎのようにつくっている。

黛玉便忖度着因他有玉，故問我有無。（甲）

黛玉便忖度着因他有玉，所以才問我的。（乙）

宝玉聽了，不知依與不依。要知端詳，下回分解。（甲）（乙）

「甲戌本」では、3回の上記箇所を「黛玉便忖度着因他有玉，故問我也有無」としているが、黛玉の忖度が、宝玉の「又問黛玉可也有玉没有」を受けていることを考えあわせると、「原本」がはたして「戚本」のように「也」を介在させる用法をとっていたかどうか、疑わしい点がある。29回の例にしても、「……下回分解」がしめすように、回のおわりの常套語的な箇所にもちいているものである。「也」を介在させる型は74回になお1例あるものの、他に用例がないところからして、「也」はもはや生産性を失っているものとみとめられ、「程甲本」「程乙本」が、この種の「也」を排除したのも、「也」のこの用法が、「也」の一般的用法とかみあわなくなり、違和感をおぼえさすほどになっていたからと思われるのである。

「醒世姻縁伝」「紅樓夢」にうつる過程での、「也」の用法の転変から推して、「也」は明末、清初にかけて衰え、清代ではその力を失うようになっていくものとみられる。そして、ここで始めて、「是不是？」「来不来？」

「吃飯不吃」型が、唯一の型として適用するに至るわけである。この型の祖型ないし原型は、さきにみたように隋唐のころにみることができ、現代語におけるように、並行する他の型を排除して、唯一の型として、口語のなかに定型化するのには、「也」がその生産性をうしなう清代にはいつてからで、近代語になってであるということができよう。文献のうえでは、「紅樓夢」

以後の作品でも散見されており、たとえば清の後期の作品である「兒女英雄伝」に、つぎのような用例がみえる。

你道我說的錯也不錯？（兒17—86）

你道姉子這話說的是也不是？（兒26—39）

姐姐道妹妹說的是也不是？（兒29—27）

你道糟也不糟？（兒25—21）

那褚一官到底来也不来，都在下回書交代。（兒3—25）

那安公子信也不信，從也不從，都在下回書交代。（兒4—26）

這親事到底說得成也不成，下回書交代。（兒25—28）

しかし、いずれも「醒世姻縁伝」「紅樓夢」におけるばあいと同じく、限られたケースのものであって、固定的踏襲の域を出ておらず、作品全体における疑問文型の使用例からみても、「也」がこの作品のなかで、生産性を保っているとはみなしがたい。旧用法による例が、なんらかのかたちで、その用法が死滅したあとでも、残存することのあることは、文学言語において一般にみられることであり、「兒女英雄伝」におけるばあいも、おそらくはこのたぐいに属するものであろう。ほぼ同時代における他の作品や、会話書「正音咀華」などに類例がみられないことから推しても、当時の口語を反映しているものとは、まずみなしがたい。

§2 「是不是？」「来不来？」「吃飯不吃？」型に関連して、「是不？」「来不？」「吃飯不？」の型についても考える必要がある。これらの型は、現代語において、一般にもちいられているわけではないが、「反復疑問」文型の一つもしくは変種としてもちいられており、文学作品にもその用例が散見されている。否定詞を文末において、「反復疑問」をしめすのは、古代語以来の表現法であって、その祖型は遠くにさかのぼることができるわけであるが、この型のばあいも、現代語におけるような型で、口語のなかに定型化するのには、やはり後代になってからである。

古代語では、さきにしめしたように、文末に「否」をおいて、「反復疑問」をしめすのが普通になっているが、「否」のところに「不」をもちいることも、少数ながらあり、このばあい、「否」との間に基本的な違いはない。敦

煌路文においても、つぎのように通用されている。
軍中有火石否？（敦86）
天下有小人否？（敦885）
臣説亦恐無益，臣願將陛下往至月宮遊看，可否？（敦225）
此園堪不？（敦364）

ところが、変文では、この型と並行して、「否」「不」のまえに「已」「以」を介在させた型がもちいられている。

昨夜念經，是汝已否？（敦177）
識一青提夫人已否？（敦720）
如今者，若見遠公，還相識已否？（敦190）
卿之所師，敵得和尚已否？（敦377）
此個地獄中有青提夫人已否？（敦726）
前者既言不堪，此園堪住已不？（敦365）
肯修書詔兒已不？（敦42）
見一青提夫人以否？（敦725）
公還誦金剛經以否？（敦186）
識兒以不？兒是秋胡。（敦158）

「已」と「以」は、古文では通用されており、変文においても「所以」を「所已」（敦181）、「以后」を「已后」（敦718）、「以為」を「已為」（敦193）などと表記し、「悲歌以了」（敦12）のごとく、「已了」を「以了」としているところからして、上掲各用例における「已」と「以」はおなじものとみてよい。これは、「孔子項託相問書」の「善哉！善哉！吾與汝共遊天下，可得已否？」（敦232）の「已否」を、斯5529では同巻の「已否」すべてをふくめて、「以不」と表記していることから、うかがうことができる。

しかし、このように、「否」「不」のまえに「已」「以」を介在させるのは、変文にはじまるわけではなく、南北朝のころにすでにその用例がみえ、「洛陽伽藍記」巻四の宣忠寺の条に、「莊帝謀殺彖朱榮，恐事不果，請計於徽。徽曰：“以太子生為辭，榮必入朝，因以斃之。”莊帝曰：“后懷榮於十月，今始九月，可爾已不？”」とある。また、唐人の手になる「五經正義」の「礼記」少儀篇の疏にも、「以測度彼軍將欲如此以否？」とある。¹¹³したがって、唐五代よりも以前、すくなくとも南北朝のころから、「否」「不」のまえに

「已」「以」を介在させる型が並行していたものとみることができる。変文では、この「已（以）」を、「来不？」型のみでなく、「来不来？」型の「反復疑問」構造の間にも介在させている。父王聞太子歸宮，遣人觀占太子喜已不喜。（敦295）^{注4}

さきにみたように、変文では「来不来？」型の構造の間に「也」を介在させている用例が多いが、「也」は上掲例文における「已」とまったく同じはたらきをしており、おそらくは、「来已不？」「来已不来？」のごとくともに「已（以）」がもちいられていたもので、「来也不来？」は、この「已」に「也」があてられていったものであろう。変文では、「来也不？」と、「来已不？」の「已」に、「也」をあてた例はみられないが、宋元以降の作品では、「来已不？」型の「已」にも「也」をあてるようになっている。

你認得那小娘子也不？（清9）

孩兒，你却没事尋死做甚麼？你認得我也不？（清14）

我教押司娘嫁這小孫押司，是肯也不？（警174）

我却有個好親在這裡，未知干娘與小娘子肯也不？（警189）

教授却是要也不？（警189）

你明日可往胥門童瞎子家起一当家宅課，看財爻發動也不？（警381）

聞得你家大娘生得標致，是真也不？（警535）

我且去看一看，什麼樣嘴臉？真像個孤孀也不？（警536）

干娘，宅里小娘子說親成也不？（警189）

柴大官人在莊上也不？（水332）

明日随直也不？（水941）

知懸相公教你們搠扒他，你到做人情！少刻我對知縣說了，看道奈何得你們也不？（水841）

范院長是足下甚麼親戚？曾娶妻也不？（水1596）

畢竟王慶到那里觀看，真箇有粉頭唱也不？（水1591）

ただし、これらの作品では、「来也否？」という型はもちいられていない。「来也不来？」「吃飯也不吃？」型には、「来不来？」「吃飯不吃？」型が並行しているのに対し、「来也不？」「吃飯也不？」には、「来否？」「吃飯否？」が並行していて、「来不？」「吃飯不？」という型はおこなわれていないのである。この点、変文で「来已否？」「来以不？」に、「来否？」「来

不？」が並行しているのとは、事情をことにしており、「不」は「也」を介して付くのに対して、「否」は「也」を介さずにつくというように、分化するようになっている。文末に直接ついた「否」「不」は「否」に、「已（以）」を介していた「否」「不」は「不」にわかれたとみることもできる。

照一席大衆也無？能令人明否？（清199）

奴今七歳，無宝珠，得成佛否？（清196）

小人告夫人，跟前這個小娘子，肯嫁與人否？（清213）

你家主人曾婚配否？（警17）

王孫平日曾有此症候否？（警19）

列位，老太師在堂上否？（警26）

皇帝已復你的原官否？（警73）

媽媽，你主意已定否？（警316）

你肯随我去否？（警406）

義士知否？（水1757）

卿知楚州安撫宋江消息否？（水1816）

酒家自與教願滄州別后，曾知阿嫂消息否？（水976）

可以迴避否？（水1025）

ところが、「醒生姻縁伝」では、「来不？」「吃飯不？」型が、「来也不？」「吃飯也不？」型に並行するようになっている。

我要吃了虧，你看我背地里咒你呀不？（醒573）

如今你家姐姐去了，正愁单着一位哩。算計請他程師娘，他不知去呀不？

（醒578）

你說你敢招架他不？（醒566）

不知你二位肯叫我去不？（醒667）

你算計算計，他去了這半個多月，咱還趕的上他不？（醒848）

這是南京地面，我待進城買甚麼去哩，你待要甚你不？（醒861）

你叫他凡事都遂了心，你看他喜你不。（醒500）

並行といっても、「来呀不？」の型の比重は、「来也不来？」型のばあいとおなじく、小さくなっており、しかもこの型の用例は、「紅樓夢」にはない。「兒女英雄伝」には、つぎのような1例があるが、さきにのべたように、やはり残存的用法の一つであって、当時の口語において、この型がなお生産

的であったとは考えがたい。

閑話休提；我且問你，褚一官在家也不？（児14—17）

「正音咀華」にも「来也不？」型の用例はなく、同書には「来不？」型の用例が多い。

咱們寬坐談談！久別至今，可有十年不？

趙老爺在家不？

集場上安靜不？百姓刁蠻不？

これらの両型の用例は、文献にあらわれることがすくないので、その消長を追うことは困難であるが、「醒世姻縁伝」以降の作品にみえる用例の推移から推して「来也不？」「吃飯也不？」型は、やはり明末から清にかけて次第にもちいられなくなり、かわって「来不？」「吃飯不？」の型が、口語のなかで定着していったものとおもわれる。この型のばあい、古代語の「視吾尚在不？」（前掲）のごとき例とまったく重なり、直接につながるようにおもえるが、古代語における用法では、「否」と「不」が未分の状態にあり、それが早期白話における分化のあと、「来也不？」型と「来不？」型の並行を経て、口語のなかに定型化したもので、古代語におけるそれと直ちにつながるものではないのである。

§3 宋元以降の作品にみられる、「来也不来？」「吃飯也不吃？」「来也不？」「吃飯也不？」型の「反復疑問」文型における「也」のやくわりは、なんであったろうか。

これには、「元曲」「水滸」などにおける、「選択疑問」文型にもちいられている「也」の用法が手がかりとなろう。「元曲」にも、「你不学上古烈女，却做下這等勾当。呸！你羞也不羞？」（金錢記，元27）、「我過去打這弟子孩兒。婆婆，可是也不是？」（合汗衫，元132）など、「反復疑問」に「也」をもちいる例が多くみられるが、つぎのように「選択疑問」にも「也」をもちいている。

我便道：你是男子也是婦人？他便道：我是婦人，在這里養娃娃哩。

（元466）

哥，可得了個兒也是女？（元466）

「水滸」にもこの用例がある。

你見我府里箇門子，却是多少年紀？或是黑瘦也白淨肥胖？長大也是矮小？有鬚的也是無鬚的？（水642）

「選択疑問」は、‘A or B’ という選択をせまるのに対して、「反復疑問」は、‘A or non-A?’ という選択をもとめるのであって、基本的にはおなじ質問方式であり、「也」のやくわりは、選択肢的項目を並列することにあるとおもわれる。ただ、中国語では、古代語、現代語のいずれかを問わず、接続作用の虚詞はかならずしも不可欠でなく、したがって、文法的機能よりも語氣的機能でもちいられているものが少ない。このばあい、ときに襯字化して、ついに省かれて、もちいられなくなってしまうこともあるわけで、「也」もおそらくそういうものであったのである。上掲の「選択疑問」文型における、「是A也是B？」の「也」も、現代語でははぶかれるようになっており、今日おこなわれている「是A，是B？」型もこのような過程を経てできてきたものとおもわれる。

ところで、さきにみたように、宋元以降の作品にもちいられている「也」は、敦煌変文では「已」「以」と表記されているものであった。

父王聞太子歸宮，遣人觀占太子喜已不喜。（前掲）

肯修書詔兒已不？（前掲）

識兒以不？（前掲）

「已」と「以」が通用することは、さきにのべたとおりであるが、この二字は、「與」字とも通用している。変文における例をあげると、つぎのとおりである。

二將研營已了，却歸漢朝。（敦39）

伯本は「已」につくるが，斯5437は「與」につくる。

遂令武士齊擒捉，與朕煎熬不用存。（敦70）

伯3697は「與」につくるが，伯3386は「以」につくる。

今日之下，乞與些些方便，還有紙筆当直，莫言空手冷面。（敦252）

斯本は「與」につくるが，伯2491は「以」につくる。

変文では、「来已（以）不？」の「已（以）」に「與」をあてている例はみえないが、上記のような通用から推して、「已」「以」はおそらく「與」で

あろうとおもわれ、「已」「以」にのちにあてられるようになった「也」も、実は「與」に由来するものであろう。その後の作品では、「也」の箇所に「與」をあてている例がすくなくないが、これは両者がその機能をおなじくするからにはほかならない。^{注5}

燕順見宋江 型意要救這婦人，因此不顧矮虎肯與不肯，燕順喝令轎夫抬了去。（水505）

令親家里便與不便哩？（醒833）

§4 「是不是？」「吃不吃？」「有没有？」型の「反復疑問」文において、それぞれの動詞に賓語などの後置成分がともなうばあい、現代語では、「是他不是？」「吃飯不吃？」「有錢没有？」のように、後置成分をなかにはさむ型（A型）と、「是不是他？」「吃不吃飯？」「有没有錢？」のように、後置成分をおしまいにおく型（B型）の二つの型がある。両型のあらわす意味はかならずしもまったく同じというわけではなく、A型においては、おわりにつく否定表現の部分が軽声になり、「不是」「没有」などは、文末の語気助詞に近いものになって、B型にくらべて、相手に確認をもとめる語勢が弱いというような点がある。しかし、このような語勢のちがいはあれ、両型が「反復疑問」文型として、ともに可能であり、ともにおこなわれているという点では、かわりがない。ところが、いままであげてきた例からしてわかるように、文献のうえでは、A型の用例しかあらわれてない。「金瓶梅」「醒世姻縁伝」ともにそうであったが「紅樓夢」「兒女英雄伝」などにおいても同様である。

你道是新聞不是？（紅17）

這藥有名字没有呢？（紅70）

你可還強嘴不強？（紅146）

少什麼不少？（紅214）

還有什麼法兒解救没有呢？（紅256）

這姓褚的可是人稱他褚一官的不是？（兒14—14）

如今我們拏分紙筆墨硯來，大家作個筆談。——只不知姑奶奶可識字不識？（兒16—22）

請示，太太合大奶奶還要甚麼不要？（兒29—10）

ばあいによっては、「吃飯不吃飯？」のごとく、後置成分を否定表現のと

ころでもくりかえして、完全なかたちで反復していることもある。

- { 楊大郎在家不在？ (金1204)
- { 老爹在家不在家？ (金 988)
- { 這遭出来，到我們這里，可要辦些什槍炮機械不要？ (官972)
- { 門生的父親是現任臬司，門生見了上頭，要碰頭不要碰頭？ (官423)

このようにA型をもちいる点では、「紅樓夢」「儿女英雄伝」のような北京語作品のみならず、下江官話への傾斜がみられる「官楊現形記」などにおいても同様であって、各作品ともおしなべて、B型がみられない。では、まったくB型が当時おこなわれなかったのかということ、そうではなく、またこのような型が、現代になって忽焉とあらわれるはずもない。清末の会話書である「官話類篇」(A course of Mandarin lessons)に、つぎのような例をあげている。

- 你 - 想家不想家 (想不想家) ?
- 這個刀 - 是你的不是 (是不是你的) ?
- 先生在中国 - 服水土不服 (服不服水土) ?

同書では、北京でもちいられているいいかたと、南京、山東でもちいられているいいかたを並列してしめすという方法をとっており、上掲の例でいうと、-のあとにのべられているA型が北京、()のなかにのべられているB型が南京または山東のいいかたということになるわけであるが、同書ではこのA、B両型についてつぎのようにのべている。

「A型は正規で、かつより普遍的なかたちであって、肯定部をいいおえてから、否定部にうつるというのが、一般的法則になっている。B型は、山東でよくつかわれており、その他の地方でも、かなりの程度もちいられている。しかし、教師のおおくは、質問されると、A型が正しいと答えることであろう。というのは、かれらは書物のうえで見なれているからである。」¹¹⁶

B型が、清末に北京以外のところで、かなり広くもちいられていたことは、これによってもうかがえるが、B型の使用がさらに早い時代におこっているであろうことは、いうまでもない。ただ、文献にその例をみないということは、白話の基礎方言になっている北京語でそういわないこと、「官話類篇」の編者がいっているように、A型を正規ないいかただとする、書物のうえか

ら得られた意識が、作者にはらっていたことなどによるものであろう。しかし、B型がどこかの地方でもちいられている限り、いつかはその反映があるもので、「磨難曲」につきのような用例がみえる。

三人進了店，店主說：二位要吃甚麼？解子說：有沒有錢吃酒？（磨119）

「紅樓夢」は、このような構造のばあいも「還有什麼法兒解救沒有呢？」（前掲）と、A型をとっているわけである。また、さかのぼって、「金瓶梅」にも、「有菜兒擺上來。有剛才荆部監送來的那讓酒取來！打開我嘗嘗，看好不好吃。」（金961）という例がみえる。一種のB型であって、このようなばあいも、「你說可笑不可笑？」（約19）、「可也不知怎麼個人兒，好相處不好？」（醒836）と、A型的にいわれることが多い。これらは、すくなくとも当時、それらの方言区でB型がおこなわれていたことをしめすものである。敦煌變文にも、「佛是誰家種族？先代有沒家門？」（陽魔文，敦377）^{注7}とあり、さらに早い時代にさかのぼることができるが、より興味を引くのは、つぎのような「否」の用法が存在することである。

不知后来若何結局，曾否放素姐出去遊玩，再看下回，便知端的。（醒761）

「否」が疑問文をつくるのは、文末についてであって、この通則は古代語、早期白話をとおして生きているものであって、上掲の文例に関連したものをしめせば、「兄長往時，曾訪羅真人否？」（水1533）のようになるのが、普通のいいかたである。このような、通則をやぶるいいかたが生れてくるのは、おそらくは、太田辰夫氏が「中国語歴史文法」で指摘するように、口語におけるB型の影響をうけているものとおもわれる。「否」のこのような用法は、若干の制限はあるが、その後にもおこなわれており、「官場現形記」にも「科甲出身人員總求大師給他一個面子，可否免其考試？」（官979）のような用例があり、現代語のなかでも、「是否真理」「能否感動群衆」「可否參加」のような用法で、もちいられている。このような用法は、「否」のB型的使用であって、口語におけるB型に対応するものである。

注1 劉景農：漢語文言文法より引例。

注2 太田辰夫：中国語歴史文法より引例。

注3 蔣礼鴻：敦煌變文字義通積，P.173

注4 斯548，斯2682，斯2352による校訂による。伯2999は「已不喜」を欠く。

注5 香坂順一：近世語ノート(三)（明清文学言語研究会報第8号）参照。

注5 C. W. Mateer : A course of Mandarin lessons p. 57

注7 太田辰夫 : 中国語歴史文法 P.409

引例書目

- (敦) 敦煌變文集 人民文学出版社 1957 北京
- (清) 清平山堂話本 古典文学出版社 1957 上海
- (警) 警世通言 作家出版社 1957 北京
- (元) 元曲選 文学古籍刊行社 1955 北京
- (水) 水滸全伝 人民文学出版社 1954 北京
- (金) 金瓶梅詞話 文海出版社 1963 香港
- (醒) 醒世姻縁伝 中華書局 1959 香港
- (磨) 磨難曲 文求堂 1936 東京
- (紅) 紅樓夢 作家出版社 1953 北京
- (児) 児女英雄伝 亜東図書館 1932 上海

() は引例における書目の略号。本文引例の略号のあとの数字は頁数、または回数とその頁数をしめす。